

## ポナペ・クサイ守備

福井県 徳 井 清 一

私は昭和十六年三月一日、現役兵として東部第四十九部隊田中隊に入営し、同年六月十五日第一期教育検閲を終了、九月一日一等兵に進級、十二月四日第五十二師団臨時編成下令同月二十一日第一機関銃隊に編入、昭和十七年三月上等兵に進級、六月二十七日復員した。

昭和十七年九月二日金沢東部四十九部隊に動員下令、九月九日動員完結、南洋諸島派遣のため九月十七日宇品出發、九月二十七日カロリン諸島ポナペ港上陸、同日より同島警備、十月二十四日編成改正下令、十二月四日善行証書付与、十二月五日予備役編入、同日引き続き臨時召集歩兵第七連隊、第一機関銃中隊に編入、転進のため十二月七日ポナペ島出發、十二月八日クサイ島上陸、十二月九日歩兵第一大隊本部に編入。

クサイ島はポナペ島の南東約三二〇カイリ東カロリ

ン諸島の東端に位置し、東南約一五キロ、南北約十二キロの玄武岩質で、全島海浜から山頂まで森林に覆われ、小河川もあり通行困難であった。

クサイ島はトラツク諸島の外郭要地であり、かつギルバート諸島及びナウル・オーシャン島方面とトラツク諸島との中継基地として艦船給水施設があった。

甲支隊主力のクサイ島の守備は山中支隊長で、クサイ島進出後、歩兵第一〇七連隊本部、連隊砲中隊・通信中隊・工兵第二中隊の四分の一および第一大隊、山砲兵第三大隊第七中隊ならびに在島海軍第四十二警備隊特設見張所などの約二千名を合わせ指揮し、第六根拠地隊司令部（クエゼリン）の指揮下にあつて同島の守備に任ずることとなった。

昭和十八年十二月、山中支隊長はクサイ島守備に關し、レロ島周辺から兵営地区、マレーム川北方約一千メートルにわたる海岸線を守備し、機動反撃により敵を撃滅する。止むを得ざるも一六五高地、一八八高地、タファヤー山頂を固守するとの方針を決定して築城に着手、十二月末までに海岸線に野戦陣地を構築すると

ともに、一部をもって現地自活のための約八町歩の荒地に甘藷の植付けを終了した。

加藤泰二中尉以下約三百名は、昌宝丸で横須賀を出港して十二月三十日トラック着、三十一日クサイ・ボナベ中間海域で米潜水艦の攻撃により、その過半数の約一九〇名を失ったが、生存者一十一名は翌十九年一月一日クサイ島に上陸し、第四十一警備隊(トラック)分派の二十五ミリ機銃六を引継ぎ、同島の防空に任ずることとなった。

一方歩兵第一〇七連隊は「軍司陸甲第九五号」により改編を下令され、旧甲支隊山砲兵第十六連隊第三大隊及び工兵第五十二連隊第二中隊を歩兵第一〇七連隊に編入すべき迫撃中隊連隊機関砲中隊、戦車隊、衛生隊を内地で編成し、同連隊に編入されることとなった。しかし、内地編成部隊は輸送船「夕映丸」で宇品出發後、マーシャル方面に対する米軍の攻撃により、クサイ島方面への進出が困難となり、十九年二月ポナペ島に進出、同連隊の指揮下に入ったため、南洋第二支隊が進出し、守備になり満州鉄嶺で臨時編成された

支隊が釜山を「良洋丸」「日蘭丸」で出港し、トラック島寄港、十九年一月三日無事クサイ島に進出した。

南洋第二支隊長は原田少将で同島進出後、在クサイ島歩兵第一〇七連隊(旧甲支隊)の主力とクサイ特設見張所、第四派遣通信隊をその指揮下に入れた。

原田支隊長は同島の上陸適地やマレー飛行場の状況から敵が上陸する場合、その主力はマレーム川正面、一部はレロ島周辺地区であろうと判断し、敵を水際で撃滅することを主眼とし、止むを得ない場合でも高地帯において敵を拒否、撃破する方針でマレーム川以南地区を南洋第二支隊、以北を歩兵第一〇七連隊にそれぞれ担任配備された。

原田支隊長は、部隊の配備は戦闘を主とした配置でなく、部隊の分散による損害の軽減及びマレーム川の水源利用などによる持久を主とした。敵が上陸したら積極的に水際に出撃してたたくという考えであり、敵が上陸したら山麓の第二線陣地、タファヤ山、四〇九高地などの複郭陣地によって死守する考えであった。クサイ島に対する米機の来襲は、昭和十八年十月、

大型一機の初偵察以來絶えていたが、十九年一月十一日初空襲に次いで、B 24爆撃機十四機が来襲、クサイ港湾施設、兵舎などに爆撃を加え、戦死傷者十二名の損害を受けた。その後二月中旬から三月中旬の間、戦闘機又は爆撃機（B 24又はB 25）数機が来襲、クサイ港湾施設、船舶および海岸陣地に銃爆撃を受け、我が海軍徴用船「ニッポン丸」「第二春山丸」「第九東洋丸」が沈没、十数名の戦死傷者が出た。

米軍機の来襲は三月中旬以降四月末までほとんど連日、五月以降六月中旬まで一日おきくらい、それぞれ一、二機の偵察が続いたが、その後は次第に減少した。部隊は昭和十九年四月末までに、全力で海岸陣地と各正面に対する予備陣地などを野戦築城し、その後はこれを補強しつつ教育訓練を受けた。

本島は他島に比べて食糧が豊富で、陣地部隊が進出するまでは、むしろ本島からマーシャル諸島に補給していたほどであったのが、陸海軍約五千名の進駐により、昭和十九年三月以後は陸軍携行糧秣も逐次欠乏したので、主食である甘藷の自活に努めながら保有糧秣

の食い延ばしを図るほかはなかった。

そこで同島に対する食糧、医薬品等補給の必要が生じ、同年五月三十日、我が呂号第四十一潜水艦は米駆逐艦、駆潜艇などの警戒網を突破してクサイ港に入港、翌三十一日夜、暗闇を利用して精米五日分、粉味噌三日分粉醤油七日分、砂糖、食塩、ビタミン若干の補給を行った。翌六月一日十五時ころまでの間、米駆逐艦等により同島に艦砲射撃を受けたが、同夜二十時ころ補給を完了した潜水艦は無事出港した。

部隊はサイパン作戦の教訓を取り入れ、山麓第二陣地を強化した。八月以降は食糧事情が悪化して非常用米麦だけとなったため、米麦の給与を停止し、甘藷、パンの実、タロ芋、タピオカを代用食として自活を続けた。このため兵員の体力は次第に低下し、アmeerバ赤痢、パラチフス、ワイルス氏病等が多発し、また栄養失調患者が逐次増加した。さらに同年十二月以降、部隊管理農場の甘藷の収穫が激減したため、部隊は甘藷の葉を混入した雑炊を主な主食として、鋭意農耕地の拡大を図り現地自活を強化した。

守備部隊は食糧欠乏に悩まされながらも築城の強化に努め、岩盤掘削による幹線坑道延べ四、五〇〇メートルと対戦車壕（幅六メートル、深さ二メートル、延べ二千メートル）を完成し、また築城資材としてマンガローブ材約十三万本伐採使用した。このころまでに栄養失調による死亡者が多数出たが、四月以降は甘藷等の収穫が逐次増加したため栄養失調患者も次第に減少した。現地自活も製塩、製麻、魚肉燻製などの生産に成功し、その他椰子ミルク、蜜、油、煙草なども生産されるようになった。労働力として、数千人の現住民を雇用した他は同島西海岸に疎開させ、軍との接触を断ったので問題は起こらなかった。

米機の来襲も昭和二十年六月以降は偵察機が毎週おむね一回飛来する程度に減少したが、同島進出以来終戦までに受けた空襲は、延べ四三万機以上に達した。同島は米軍の進攻を受けることなく終戦を迎え、守備隊は同年八月十七日十八時をもって戦闘行動を停止し、歩兵第一〇七連隊は八月二十一日、軍命令により軍旗を奉焼した。

九月八日五時、マーシャル・ギルバート方面最高指揮官代理は駆逐艦二隻でクサイ港に入港し、原田中尉と同艦上において降伏調印式を終了した。在島陸海軍部隊は復旧作業などを実施しながら歩兵第一〇七連隊主力一、三一五名（内患者九五名）は十一月五日病院船「氷川丸」「高栄丸」によりそれぞれクサイ島港を出港し、同月十三日、浦賀港着復員下命、一月十六日召集解除、無事帰郷した。

## 僚友は玉碎

### パラオ本島の戦い

栃木県 佐々木 由一郎

私の所属した第十四師団歩兵第五十九連隊が南方方面作戦参加のため動員令が下りたのは昭和十九年三月一日であった。満州国龍江省蕭々哈爾からの移動であり、二十五日、旅順出港、四月一日、門司港出帆、同三日、横浜港に入港。久しぶりに故国の山河や町や港